

映画で考える 戦争と平和 / 第7回

『ブリッジ・オブ・スパイ』授業ガイド

対話と交渉で争いを止める —— 『敵』とも、話し合える。』

教員用・指導資料（対象：中学生以上）

本資料はAI（Claude / Anthropic）で作成しています。授業でのご利用前に事実関係をご確認ください。専門家の監修ではありません。授業での使用可否・場面の選択・学年の適否は、担当の先生が最終判断してください。

1 授業の概要

テーマ	対話と交渉で争いを止める（相手が「敵」でも、守るべきルールと話し合いの力）
教材映画	『ブリッジ・オブ・スパイ』（原題 Bridge of Spies／2015年・アメリカ／監督：スティーヴン・スピルバーグ）
対象	中学生以上。映倫G。激しい暴力描写は少ないが、ベルリンの壁を越えようとした人が撃たれる場面がある
時間	標準100分（50分×2）。上映142分。前半（裁判）・後半（交渉）の厳選クリップ
中心概念	冷戦／公正な裁判を受ける権利／信頼と交渉／交渉の4つのコツ
ねらい	相手が「敵」であっても守るべきルールがあることを理解し、対話と交渉で争いを止める方法を考える
準備物	生徒用ワークシート（別PDF）／冷戦期のヨーロッパ地図（東西ドイツ・ベルリン）／筆記用具

2 内容への配慮（必ずお読みください）

⚠ 描写と史実の扱い

日本の映倫はGで、激しい暴力描写は少なめです。ただし、ベルリンの壁を越えようとした人が撃たれる場面などがあります。

- 冷戦の構図（米ソ対立、東西ドイツ）を事前に簡単に補う。
- 実話をもとにしているが、一部に脚色があることを伝える。
- 「スパイ＝悪」「弁護する人＝裏切り者」という単純な図式に流れないように、権利と公正さに焦点を当てる。
- ロールプレイを行う場合は、役割上の意見と本人の意見を区別できるよう配慮する。

📄 レイティング・著作権について

- 日本の映倫はG。ただし配信版・ソフトにより表示が異なる場合があるため、使用予定の版をご確認ください。
- 授業での上映には教育機関向けの権利処理が必要になる場合があります。本教材の文章はすべてオリジナルで、ポスター・場面写真は使用していません。

3 冷戦とスパイ交換（予備知識）

冷戦とは

第二次世界大戦のあと、アメリカとソ連は、直接大きな戦争はしないまま、にらみ合いを続けました。これを**冷戦**と呼びます。

映画の背景にある出来事

1957年、アメリカでソ連のスパイとしてルドルフ・アベルが逮捕されます。1960年、ソ連上空を偵察していたアメリカの偵察機が撃墜され、パイロットのパワーズが捕らえられました（U-2撃墜事件）。1961年にはベルリンの壁が築かれ、アメリカ人学生プライヤーも東ドイツで拘束されます。1962年、ベルリンのグリーニッケ橋でアベルとパワーズの交換が行われました。

💡 「敵」にも権利がある

主人公の弁護士ドノヴァンは、相手が敵国のスパイでも、**国のルール（憲法）は同じように守られるべきだ**と考え、世間から責められながらも公正な裁判を求めました。「敵だから何をしてもいい」と考えると、自分たちの社会の大切なルールまで壊れてしまう——この視点は、公民の学習にもつながります。

交渉の4つのコツ（板書用）（板書用）

① 相手を人として見る

「敵」ではなく、事情をかかえた一人の人間として向き合う。

② 目標をはっきりさせる

何を必ず守り、何なら譲れるのかを決めておく。

③ 相手の「得」も考える

お互いに受け入れられる形を探す。

④ 簡単にあきらめない

行きづまっても、粘り強く話し続ける。

🎯 この授業の到達目標

相手が「敵」でも守るべき権利があることを説明でき、映画の交渉場面を根拠に、対話で争いを止めるためのコツを自分の言葉でまとめられる。

4 100分授業の流れ（50分×2）

時間	ながれ	先生の動き・発問
0-10分	導入	「戦争を始めるのと止めるのは、どちらが難しい？」と問う。
10-20分	背景	地図で東西ドイツ・ベルリンを確認し、冷戦とスパイ交換の年表を示す。
20-48分	映画を観る①	ドノヴァンがアベルの弁護を引き受け、世間から責められる場面（クリップ）。
50-72分	映画を観る②	東ベルリンでの交渉、グリーニッケ橋の場面（クリップ）。
72-90分	ワーク記入	「交渉の4つのコツ」をもとに、身近なもめごとの話し合い方を考える。
90-100分	共有・まとめ	板書「『敵』とも、話し合える。」で締める。

🌱 まとめ

争いを止める方法は、武器だけではありません。相手を一人の人として見ること、守るべきルールを手放さないこと、粘り強く話し続けること。ドノヴァンの交渉は、国どうしの対立だけでなく、教室や日常のもめごとにも通じるヒントを示しています。

5 映画の背景知識

原題／邦題	Bridge of Spies ／ ブリッジ・オブ・スパイ
製作年・国	2015年・アメリカ。上映142分。日本公開：2016年。映倫：G
監督	スティーヴン・スピルバーグ（特集第4回『シンドラーのリスト』の監督）
脚本	マット・チャーマン、コーエン兄弟
実話の背景	1962年、ベルリンのグリーニッケ橋でソ連のスパイ・アベルと米国のパイロット・パワーズの交換が行われた

主なキャストと役柄

- ・ トム・ハンクス（ジェームズ・ドノヴァン役）：保険を専門とする弁護士。粘り強く、ユーモアを忘れない交渉人。
- ・ マーク・ライランス（ルドルフ・アベル役）：静かで誠実なスパイを演じ、アカデミー助演男優賞を受賞。特集第3回『ダンケルク』ではドーソンを演じている。

「スパイ橋」

グリーニッケ橋は東西ドイツの境にかかる橋で、冷戦中に何度かスパイの交換が行われたことから「スパイ橋」とも呼ばれました。今はふつうに渡ることができます。

※上記の事実は公開情報（映画.com、Wikipedia等）をもとにしています。細部・脚色には諸説あるため、授業前に必要に応じてご確認ください。

6 発問例・見取りのポイント

Q. なぜドノヴァンは、世間から責められても敵国のスパイを全力で弁護したのだろう？

→ 「どんな人にも公正な裁判を受ける権利がある」という考え方に注目させる。

Q. ドノヴァンとアベルの間に生まれた信頼は、交渉にどう役立った？

→ 相手を人として見ることが、交渉の出発点になることに気づかせる。

Q. 「交渉の4つのコツ」は、身近なもめごとにも使える？

→ 教室や家庭の例に置きかえて考えさせる。具体的な個人名は出さない。

ワークシートの見取り（評価の観点）

- ・ 相手が「敵」でも守るべき権利があることを、映画の場面を根拠に説明できているか。
- ・ 交渉のコツを、身近な場面に置きかえて具体的に考えられているか。
- ・ 対立する相手の立場や「得」にも目を向けて書けているか。
- ・ 意見の発表は強制せず、書いた内容を尊重する（家族の戦争体験などに触れる生徒への配慮）。

7 シリーズ全体像

回	映画	テーマ	目安
1	1917 命をかけた伝令	一人ひとりの命の重さ	中学生～
2	西部戦線異状なし	戦争を美化しない目	高校生～
3	ダンケルク	生きて帰るという勇氣	中学生～
4	シンドラーのリスト	一人の選択が命を救う	高校生～
5	硫黄島からの手紙	敵にも家族がいる	中学生～
6	ガンジー	暴力を使わずに社会を変える	中学生～
7	ブリッジ・オブ・スパイ	対話と交渉で争いを止める	中学生～
8	ホテル・ルワンダ	見捨てない勇氣	中学生～

8 参考資料（主な出典）

ブリッジ・オブ・スパイ 作品情報（映画.com） <https://eiga.com/>

Wikipedia「ブリッジ・オブ・スパイ」 <https://ja.wikipedia.org/wiki/ブリッジ・オブ・スパイ>

作品：映画『ブリッジ・オブ・スパイ』（2015年、監督スティーヴン・スピルバーグ）

© 2026 FilmEdu AI / 本資料はAIを活用して作成しています。授業でのご利用前に事実関係をご確認ください。専門家による監修ではありません。授業での使用可否・場面選択・学年の適否は担当教員の判断によります。作品の著作権は各権利者に帰属します。授業での上映には適切な権利処理（教育機関向けライセンス等）が必要になる場合があります。内容の誤りにお気づきの際はお問い合わせよりご連絡ください。